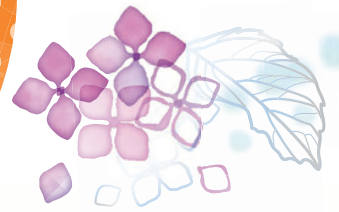


# ふんいきりん。



さかもと  
**坂本** きょうこ  
**響子**さん

社会福祉法人森田記念会  
サテライトさわの森 アートセラピスト



サテライトさわの森は、地域密着型老人福祉施設で、入居者やショートステイ利用者の生活介護を行なっています。坂本響子さんは、アートセラピストとして勤務し4年目になります。アートの専門職としてのここでの仕事は、陶芸教室、手づくり教室、絵手紙教室を月に一回行い、さらに大型の布貼り絵や個人制作のサポートをすることです。「入居者さんやショートステイ利用者さんが、少しでも楽しみを見出せるようにお手伝いしています。」とのこと。コロナ禍で外出の機会が減った際には、施設内で取り組める作品づくりは、利用者の大きな楽しみとなっていました。

### きっかけは、陶芸教室のボランティアから

女子美術大学工芸科陶芸コースで学んだ坂本さんは、学生時代は福祉とは全く関わりがなかった

そうです。「卒業後に笠間で陶芸の仕事をしていた時に、この施設に勤務していたアートセラピストの先輩に声をかけていただき、陶芸教室をお手伝いしたことが仕事を始めたきっかけです。それまでは福祉の世界に触れたことがなかったのですが、アートを介して高齢者の方々が笑顔になる様子を見て、福祉とアートの関わりに興味を持ちました。」と振り返ります。

坂本さんは正社員として就職し、同施設で3人目のアートセラピストになりました。仕事を始めて感じたことは、「それまでは自分一人で作品をつくっていましたが、この仕事に就いて、人に教えることは楽しい、人と一緒につくることは楽しいと気づきました。福祉の現場にアートが必要とされていることがすごく嬉しかった。」と話します。アートと福祉とを結ぶ先駆けとなっている坂本さ

# アートで高齢者の方たちを笑顔にしたい。

んは、「福祉とアートがもっと盛んに交流していくと、福祉業界にも新しい風が吹いて良い影響が出ると思います。アートも高齢者や老人ホームと関わる機会があまりないので、その接点をもっと増やしていくと、美術大学の学生の就職先としても可能性が広がると感じています。」とのこと。

## アートの良い効果が見えた時にやりがいを感じる

4年目となった現在、「最初はがむしゃらにやってきましたが、最近やっと自分に何が求められているのかがわかってきて、一人ひとりの個性やどう生きてきたかを知ることが大事なのだなと思います。」と言います。昔編み物をしていた方には「ちょっとやってみませんか？」と声をかけると、そこからどんどん作品が生まれていくそうです。「認知症のある方、片麻痺の方は、つくることをあきらめている方もいます。自分はだめだという気持ちになっているのですが、小さいものから始めるとだんだん思い出してきて、どんどんできるようになります。やる気をなくしていた方が素晴らしい作品をつくれるようになるということは、本人にとって喜びだし、家族もスタッフもその変化に驚きます。そういう良い効果が見えた時が、私のやりがいになっています。」と、話してくれました。現在、制作に取り組んでいるのは名画を題材にした貼り絵の作品です。去年は、県福祉会館のギャラリーで3年間で制作した大型貼り絵などの作品を展示しました。「全員で見に行き、皆さんとても感動していました。認知症の方もそれを覚えていて、今でも話してくれることが嬉しいです。今後の目標は、施設を美術館にしていくこと。外に出なくてもここで美術が感じられるようにして、皆さんが持つアーティストの芽を育てていきたいです。」と話してくれました。



## 美術が得意な人が活躍できる場、必要とされている場

アートセラピストの仕事は、「美術が得意、絵を描くのが好きな人が活躍できる場であり、必要とされる場」と言う坂本さん。どんな人に向いているかとたずねると、「利用者さんと一緒に何かしてくれる人に向いています。アートと福祉の接点に気づかない人も多いと思いますが、今回の取材がきっかけとなって知ってもらえればいいし、大学でもこういう仕事があると伝えていけるといいですね。」とのこと。「施設でも、アートの効果をもっとわかってもらえるようにしていきたい。あまりアートセラピストのいる施設はないので、もっと広まって欲しいです。一施設に一人のアートセラピストがいたら、楽しい時間が持てるだろうなと思います。」と熱い思いを持つきりり人です。



▲利用者の皆さんが制作した作品